

与謝野寛・晶子と北備溪谷

—なぜ夫妻は高梁への再遊を果たさなかったのか—

石 上 敏

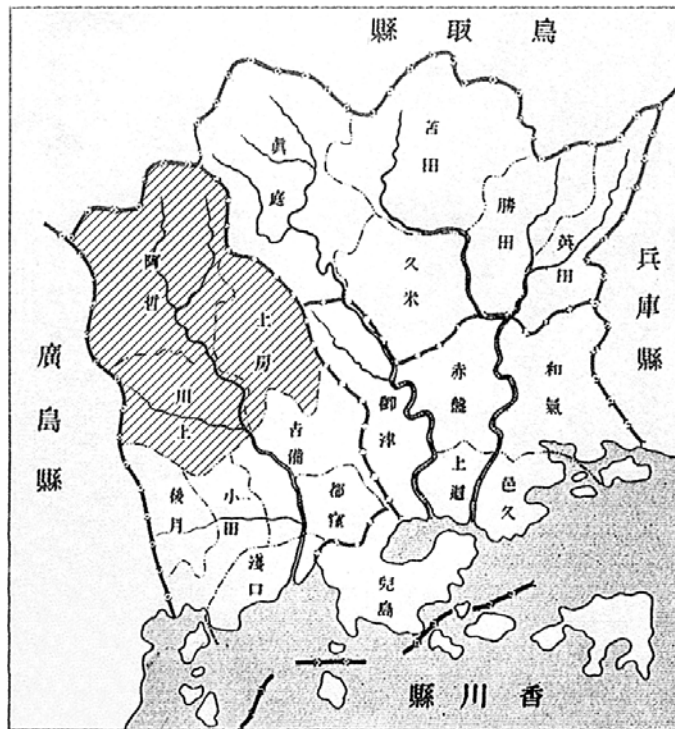
はじめに

沖 良機氏の『資料 与謝野晶子と旅』⁽¹⁾が刊行されて、十年余りがたつ。同書は、明治三十五年（一九〇二）より、昭和十七年（一九三七）まで三十五年間にわたる晶子の旅を、彼女の歌と絡めて丹念に考証し、さまざまな側面から分析した労作であった。

晶子が、主に夫の寛とともに、とりわけその壮年から晩年にかけて各地を訪れたことは周知の事実であり、そのことが晶子の豊饒な詩囊をさらに肥やすのにどれほど役立ったか、これもまた大方の同意するところであろう。その意味でも、沖氏の著作はまさに待望の一冊であった。

晶子と並び近代歌人の最高峰を形成する若山牧水も、「旅の歌人」として著名であったが、旅に関しては与謝野夫妻も負けてはいない。日本全国を回った距離では、より長く生きたということもあり晶子のほうが牧水よりもむしろ長じているだろう。⁽²⁾

本稿では、与謝野夫妻の旅のひとつとして知られる、岡山県伯備線沿線への旅について考察していきたい。すなわち、昭和四年（一九二九）秋の与謝野夫妻の「北備溪谷」⁽⁴⁾来遊を考察の対象とする。昭和四年当時の阿哲郡（現・新見市）と、上房郡・川上郡（現・高梁市など）を合わせた、旧備中国北部が「北備」である（地図）⁽⁵⁾参照。斜線部＝阿哲・上房・川上の三郡が「北備」⁽¹⁾。



地図1・「北備」の範囲（『阿哲郡誌』所載「阿哲郡明細図」より）

ところが現在、この旅を昭和五年のことであるとすると本も少なくない。その多くは、孫引きから成るガイドブック類ではあるものの、この旅に関しては、僅か八十年前のことであるのにもかかわらず、来訪の年次すら不明確になっているのである。はたして昭和四年と五年との二説は、どちらが正確なのであるか。そして、二説並存のきつかけは、単なる誤解や誤記のたぐいであつたのだろうか。

そうではなく、おそらくそれにはそれなりの理由があつた。私は、新見在住の間に、与謝野夫妻来遊当時を知る方々を、伝手をたどつて訪ねようと試みた。その結果、以下に述べるような収穫を得たが、幸い御存命である方々も多くは高齢に至つて、残念ながら詳しい話を聞けないことがほとんどだつた。また、その一方で文献資料も、従来知られている以上のものは出現しないままであつた。そのような中、岡山市内の百貨店で開かれた古書展示即売会に「芳賀直次郎宛与謝野鉄幹・晶子書簡」が出品され、抽選の結果それを入手する僥倖に恵まれた。

この書簡は、目録を見たときの予感に違わず、私にとって極めて貴重なものであつた。それはまず、与謝野夫妻の新見来訪の時期になぜ昭和四年と五年の二説が並存しているのかという疑問に答えるものであつたからである。またこれは、昭和四年の与謝野夫妻来訪及び、それに続く翌五年の再訪計画と来訪取りやめという事実の背景と、その詳細を生き生きと垣間見させてくれる、実に興味深い書簡であつた。

本稿では、この書簡をもとに新しく知ることのできたいくつかの事

実について、すなわち、従来知られていなかった昭和四年と五年の夫妻と「北備」との関わりについて、順を追って述べて行くこととしたい。

一、与謝野寛・晶子書簡

まずは、書簡の全文を以下に掲げておきたい。筆跡の大部分は寛のものであるが、一八九ページに写真を掲げたように署名は寛と晶子の連名である。封書の筆跡も寛であるが、封筒は晶子のネーム入りである。以上のような事情から、この書簡を、寛を主体に「与謝野寛・晶子書簡」と呼んでおきたい。

書簡本体は長さ一三〇・一センチ（上辺）、一二九・七センチ（下辺）×幅一八・二センチ。白地無地の手製の巻紙を、九二・三センチと三七・七センチの二枚、〇・二センチほど重ねて貼り合わせたものである。紙質は必ずしも上質ではない、やや硬めの洋紙。一三一・五×一九・七センチの裏打ち紙（台紙）に貼付されている。封筒は、現状二一・八×八・五センチで、上辺に截断の形跡が残る。右辺を切り開かれ、二三・〇×一七・八センチの台紙に貼付されている。下辺の「舌」のみが現存し、裏面に封緘めの「×」印がかるつじて読み取れる。添付紙・識語等はなく、旧蔵者・伝来等は不明。

翻刻に当たり、特殊な文字は、現在普通に用いられている文字に改め、句読点・改行は一切原文のままとした。

（封筒、表）

〔切手（三銭）〕（昭和五年六月十九日消印）

岡山県 高梁町

芳賀 直次郎様

恵存

（封筒、裏）

与謝野 寛

〔東京市外、下荻窪、三七一（電話荻窪一五三）〕

与謝野 晶子（「」内活字）

（本文）

啓上

御芳情の御志を頂戴致し

忝く奉存候。御健勝に入

らせらるゝ御事をお喜び申上候

私ども山陰道に余り多くの

時日を費し（五月十五日より

本月三日まで）候ため、東京に

急ぎて帰らねばならぬ用

事（出版の事にて）を延
 ばしがたき事情有之、三
 朝温泉より京都へ引返
 し、京都に一泊し、帰京
 仕り候。右様の次第にて
 伯備線より御地へ再游
 致の希望を放擲し、まことに
 遺憾に存じ申候。また
 御待ち被下候。御地の諸君子に
 甚だ相済まぬ事に存
 じ申候。何卒御寛恕
 被下度候。
 御患与の人形、何れもよき
 趣味の出来にて、珍重仕り候。
 御命じの歌を、其内差出し
 可申候。
 次に御地女学校の教科書として
 御採用下され候義いかゞ置
 下候也。よろしく御配慮
 願上候。
 孟暑に向ふ御折柄、御自
 愛の程祈り上げ候。

山陰道にては、日の御埼まで
 参り、大山へも御寺まで登
 り申候。初夏の好季
 節なりしたため、各地とも
 景色よろしく、すべて満
 足仕り候。たゞ御地へ廻り
 得ざりしのみが予定に外
 れて残念に存じ申候。
 御地の諸君へよろしく御
 伝へ被下ゝやう願上候。

拜具。

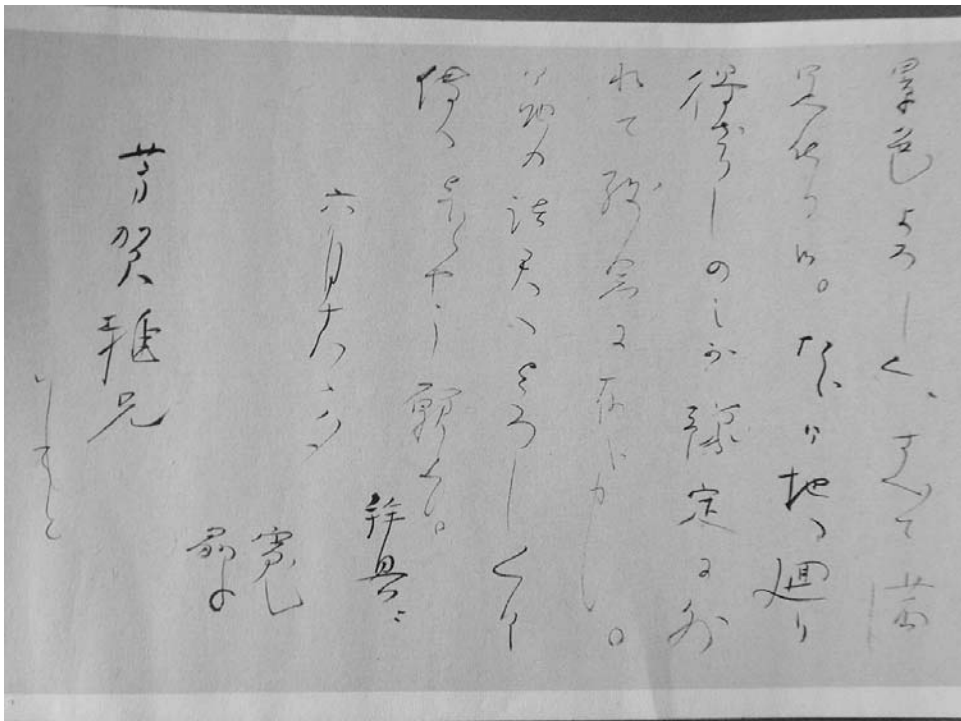
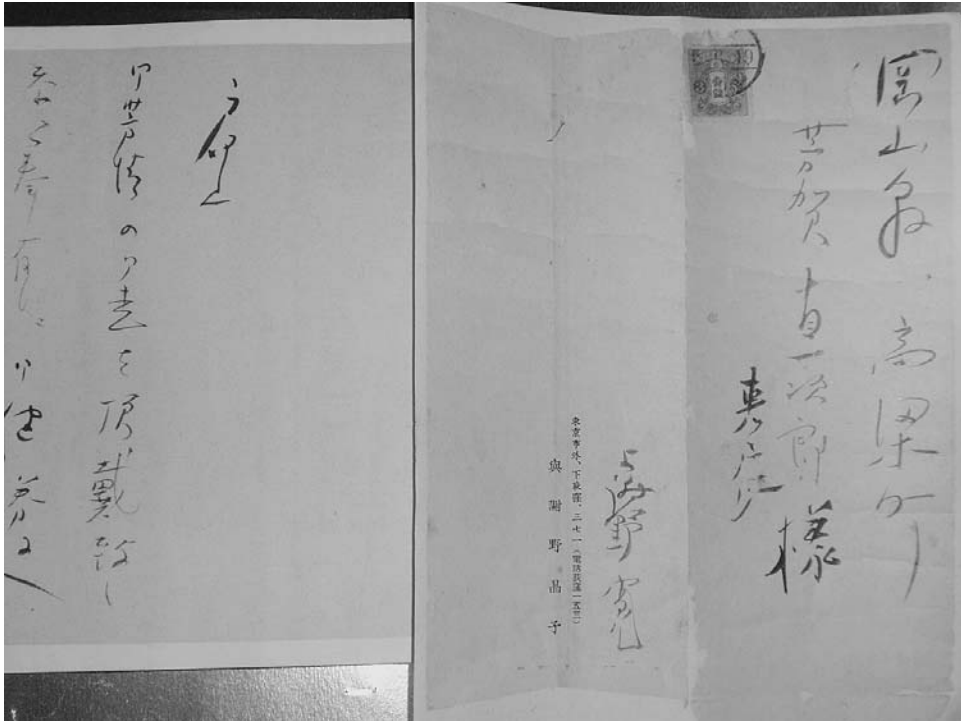
六月十八日夕

寛

晶子

芳賀雅兄

御もと



写真・昭和五年六月十八日付、芳賀直次郎宛与謝野寛・晶子書簡

二、書簡の現代語訳と注釈

次に、この書簡本文をA～Iの九つのブロックに分け、現代語訳してみたい。

A お心尽くしの品物を頂戴し、ありがたく存じます。御健勝でいらっしゃることをお喜び申し上げます。

B 私どもは、山陰道で余りに多くの日時を費して（五月十五日より六月三日まで）しまいましたため、東京に急いで帰らなければならぬ用事（出版のこと）を延ばせない事情があり、三朝温泉より京都へ引き返し、京都に一泊し、帰京いたしました。

C 右のような次第で、伯備線で御地に再遊するという希望をあきらめ、まことに遺憾に存じます。また、お待ち下さっていた御地の皆様方に、たいへん申し訳ないことと存じます。なにとぞお許しいただきたく存じます。

D いただいた人形は、どれもよい趣味の出来で、大事にしております。ご依頼になった歌を、そのうち差し出すことができたと存じます。

E 次に、御当地の女学校の教科書として御採用下されるといっ話、どのようになりましたか。よろしく御配慮をお願いいたします。

F 猛暑に向かう季節とて、御自愛の程を祈ります。

G 山陰道では、日の御碕まで行き、大山でもお寺まで登りました。初夏の好季節でしたため、各地とも景色がよく、すべて満足いたしました。

した。

H ただ、御地へ廻ることのできなかったことだけが、予定に外れて、残念に思っております。

I 御地の皆様へよろしくお伝え下さるよう、お願いいたします。

以下に、この手紙に対する注釈を試みよう。

まず、Aは芳賀直次郎氏(註)よりの贈り物への返礼にはじまる。Dから、それが複数の人形であったことがわかる。これらはおそらくは、夫妻の高梁来訪の折りに、土産として渡そうと用意していた人形であり、夫妻の再訪が叶わなかったゆえに郵送したのである。

BとCは、前年に引き続き高梁を訪れることができなかった理由を述べ、詫びた部分である。

伯備線は、伯耆国（鳥取県西部）と備中国（岡山県西部）を結ぶ路線であり、与謝野夫妻が来遊した昭和四年の前年に当たる昭和三年に全通した。伯耆大山駅と倉敷駅間一三九・六（現在は一三八・四）営業キロの名称であるが、鳥取側ではすべての列車が米子駅まで、岡山側ではすべての列車が岡山駅まで乗り入れているため、米子・岡山間の路線とみなされている。備中高梁駅は、伯備線岡山県内の駅（倉敷駅から三四キロ）である。

以下に見ていくように、夫妻は、伯耆大山駅から一〇〇キロ余り先にある、前年に足を運んだばかりの高梁（とその周辺）を、一年後に再び訪れるのがいささか億劫になって、伯耆大山から南には向かわ

ず、三朝温泉を経て山陰線で京都まで出て、東京に帰ってしまったというのが、どうやら本当のところなのであった。Cで寛がひたすら恐縮しているのも、そのことでのやましい気持ちがあったからかもしれない。

ちなみに、この手紙に見るようなキャンセルの仕方を、現代の若者言葉で「ドタキャン」と称するようだ。「土壇場キャンセル」の略語である。

Dは、先述の通りAに対応するのであろう。芳賀直次郎氏もしくは芳賀氏たち高梁の人々が送った人形をほめている部分である。「何れも」とあるから複数であったはずで、当時から知られる高梁近辺の人形といえば、まずは成羽町（二〇〇四年一〇月に高梁市と合併）の備中神楽人形が思い浮かぶ。他にも、粘土製の土人形としては倉敷の「ひねり人形」や久米村（一九五五年から久米町、二〇〇五年に津山市に編入）の「ねり天神」が挙げられる。和紙人形であれば、苫田郡鏡野町をはじめ、伯備線沿線では新見市の神代和紙などが知られ、倉敷市・西大寺町（現岡山市）・邑久町（現瀬戸市）などの張り子人形も知られる。全国的には倉敷の人形が有名であり、高梁から近くもあるが、地域的に見ても、成羽の備中神楽人形あたりの可能性が高いのではないかと考えられる。

これに続く部分は、芳賀氏が、おそらく人形に添えた手紙で寛と晶子に歌を所望したのであろう。寛は、「またいつか」と、やんわりと断っている。このような場合、どれだけの比率で寛や晶子が歌を詠ん

だ（あるいは一筆揮った）のかは明らかではないが、芳賀直次郎氏たち高梁の面々にとってみれば、この返事はまさに踏んだり蹴ったりであった。

Eは、この書簡の中でも、別の意味で興味深い部分である。寛は、女学校の教科書として採用なさる話は、どうなったかと問うている。目的語が欠けているのは、押し付けがましさを少しでも軽減しようと思ったからだろう。それは、晶子の歌集であったか、あるいは寛の詩集であっただろうか。または、この頃夫妻が伊里（現備前市）の正宗敦夫（国文学者。作家正宗白鳥の弟）とともに取り組んでいた日本古典全集の中の一冊であっただろうか。女学校ということからは、晶子の歌集が日本古典全集本あたりの可能性が高いと思われるが、残念ながら確認できない。

そしてこれは、おそらく前年の高梁訪問の折りに、教科書としての採用を依頼していたことの確認であったと思われる。一年後にまだ採用が決まっていなかったことは、たぶん色よい返事はもらえなかったのだろう。夫妻のドタキャンの遠因には、あるいはこのような背景もはたらいていたかもしれないと勘繰りたくなる。

一方、高梁の人々にとってみれば、再訪の約束を反故にされた相手の依頼を、いくら与謝野夫妻であっても、この後に素直に聞き入れたものかどうか。夫妻を招いた「有志」（「北備溪谷の秋」）の教科書ならまだしも、女学校の教科書となると、どうであっただろうか。この頃、高梁の女学校（順正女学校）で与謝野夫妻が関わった著書を教科

書として採用したという事実を、現在のところ私は確認していない。

つまり、与謝野夫妻の北備来訪は、あえて身も蓋もない言い方をすれば、セールのための出張でもあったということになる。晶子自身の言葉を借りれば「旅かせぎ」(昭和六年五月十六日付、平野万里宛書簡¹⁰)の内実の一端に、このような側面があったことになる。かつて別の与謝野寛書簡をもとに考察したように¹¹、寛が慶應義塾大学に教授として就職する前は言うまでもなく、就職したあとと与謝野家の家計が随分苦しかったことは、これもまた周知の事実である¹²。十一人もの子供を育てるために、相当の出費を要したことは想像に難くない。

それはそれとして、現在の目から見ると与謝野夫妻ほどの名家にして、出版物の売れ行きが死活問題であったことは、やや意外である。

しかし、当時にすれば、それはむしろ当然のことであつただろう。『みだれ髪』で目覚ましいデビューを飾った晶子であるが、いつまでもその人気だけでは立ち行かなかつた。また、当時とすれば画期的な古典文学全集の刊行も、義務感や使命感だけでは不可能であつた。

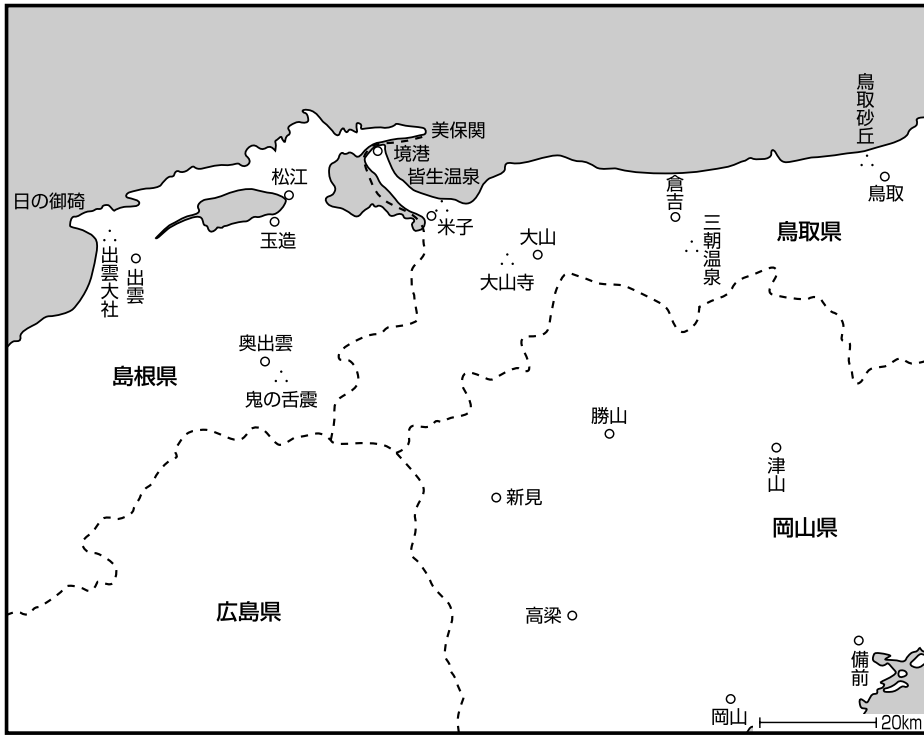
改めて別の見方をすれば、そもそも門人数の拡大は経済的基盤の拡大という行脚の真の(と言つのが言い過ぎであるならば、隠れた)目的は、職業的歌人や俳人が出現して以来の伝統的必然と言つてもよい。世の中には、ただ詩囊を肥やすだけの物見遊山というものもあるだろうが、私などにはこの時の与謝野夫妻のような人間臭い旅のほうが、むしろ好ましく思える。少なくとも彼らの人間的な側面をうかがい知ることができて、これは興味深い逸話であつた。¹³

さて、F以下は、結語と呼ぶべき部分である。他の詠歌や書簡、紀行などから、この折り(昭和五年五～六月)の山陰周遊はもちろん知られていたが、Gによって、与謝野夫妻の五月十五日から六月三日までの足取りが、より明確になる。¹⁴

次ページの地図2を参照していただきたいが、日の御碕は、出雲周遊エリアの西端と呼ぶべき名所である。京都峰山から宮津・岩滝・天橋立を回り、城崎・鳥取を経て来たと与謝野夫妻は、ここを西端として、出雲では松江・玉造・奥出雲・美保間などを廻つたのであつた。それに続けて再び赴いた鳥取では、境港・米子・皆生温泉を経て、大山では大山寺まで登り、倉吉の三朝温泉から京都に向かつている。鳥取と鳥根を合わせ十日近くかけて廻るのだから、ずいぶんゆつたりした旅であつたことになる。現代のバスツアーならば二泊三日、下手をしたら一泊二日で廻るだろう。そのような旅の果てに、寛がこれらの景色を褒め、「すべて満足」と書くのは、与謝野夫妻の本心であつたに違いあるまい。¹⁵

しかし、別の地方をあまりにほめすぎたと思つたのか、寛は続けてHで、御地に行けなかつたのは予定外のことと残念だつたと付け加えている。あたかも、そちらの風景も負けてはいないと言いたげである。高梁の人々に気を使っていることは、Iで重ねて「御地の諸君によろしく」と繰り返す口調からもうかがえる。

さまざまな詩的インスピレーションを得たこの地方を、与謝野夫妻が昭和五年に敬遠したのは、二年連続(八ヶ月後)という訪問が、あ



地図2・与謝野寛・晶子、山陰周遊地図

まりに短いインターバルであったからと考えたい。

特に、いったん奥出雲まで足を延ばして再び山陰線沿いへと戻り、また改めて伯備線で米子から高梁に向かうのは、当時の交通事情を考えた場合、かなりの負担だったと想像する(地図2参照)。夫妻ならずとも、三朝温泉からそのまま京都に戻り、東京に向かいたいと思う気持ちはわからないでもない。また、前年の訪問は、紅葉の絶景で知られる高梁川沿いの溪谷を訪れるのに最も時宜を得た日程であったが(中でも著名な豪渓を、夫妻は帰京前日に訪れている)、今回は晩春から初夏である。確かに新緑の溪谷も美しいが、季節を問わず、日本の旅を経験してきた夫妻の食指を動かすには足りなかったのである¹⁶⁾。

山陰地方で思わず時を過ごしてしまったというのも、依頼を承知したものの、最初からそれほど行きたくなかったことの反映、つまりは言いわけであったかもしれないと思う。しかしいずれにせよ、五月十五日に東京を発つて以来、二十日目となる六月三日の夫妻にとって、さらに高梁へと向かう余裕はなかった。このことに、かつて過ごした伯備沿線、備北地域への愛着をもつ者としては、少しばかり恨みがましい気持ちを覚えるのである。

さて、以上のことから、与謝野夫妻の備北来訪に昭和四年説と五年説が並立したままであった事情にも納得がいく。実現しなかった昭和五年の再来時も、その直前まで地元では大々的な歓迎の準備が進められていたはずだからであり、むしろ、前年よりもこのときの方が、

多くの人たちが歓迎の準備に関わったと容易に想像できるからである。

とするならば、結局実現しなかったけれども「昭和五年の与謝野夫妻来訪」と、その歓迎準備を記憶していた人たちが数多くいたと考えることができる。それも、実際にその前年来訪の事実があったのだから、「与謝野夫妻が来訪した」という記憶それ自体、確かなものとして残り、「かつて与謝野夫妻がこの地方に来た」と言い伝えられたことであろう。その痕跡は、夫妻が四泊を過ごした油屋のみならず、現在もこの地域に明らかに残っている。そして、「来訪した」という確かな事実の前に、それが昭和四年であったか、あるいは五年であったかという来訪の年次は、次第に曖昧になって行ったものと思われる。これは、むしろ当然の成り行きと言ってよい。

以上、書簡に書かれた内容は、決して少なくない情報を私たちに伝えてくれる。ちなみに、ここまでの全文は、先に述べたように寛の筆跡である。そして、末尾の「晶子」の署名のみが、晶子の筆跡に見える。

「雅兄」と呼ぶことから、芳賀直次郎氏が高粱雅壇に関わった人物であることがうかがえる。実際、芳賀氏には『明月遺墨集』（同行会、一九三七年）、『玄海余韻』（同行会、一九四二年）などという著書もあり、まさに「雅人」、昭和初年代以降の高粱を代表する文人と呼ぶべき人物であった。晶子は「北備深谷の秋」に、「芳賀直次郎氏が終始深切な案内役をして下さった」と記しており、芳賀氏の

教養が並々ならぬレベルにあったことを窺い知るのである。

右の署名を見ると、いかにも夫唱婦隨の趣きがあるが、それは寛の書いた手紙であったからだろう。興味深いことに、封筒自体は晶子の名前が印刷された封筒で、それを寛が借用するという形である。実は、昭和に入る前後から、このように晶子の封筒を寛が使う例は珍しいくない。

かつて調べたところによれば、寛は生涯にただ一度、自分の名前入りの封筒をつくっている。昭和七年（一九三二）九月頃にはじめて「東京市外、井荻町、荻窪一の一一九 与謝野寛 電話荻窪一五三番」と印刷した封筒を作ったが、約半年後に東京市の市区改正があり、住所名称が東京都杉並区へと変わった結果、せっかく作った封筒が使えなくなってしまった。そして、これ以後寛は二度と自らのネー△入りの封筒を作らず、昭和十年（一九三五）に没している。

自分の名前入り封筒を持たない寛は、晶子の封筒をしばしば借用し、先掲の写真（封筒裏）のように、印字された晶子の名前の脇に自分の名前を書いて、方々に送っている。これは、なかなか愉快な逸話である。ただし、右に述べたような背景から見ても、これは必ずしも婦唱夫隨の実践であるとは言えず、また、寛が自らを卑下した証拠とも受け取れない。ただ自然に、たまたま知名人である妻の封筒を夫が借りて、それを用いて手紙を送っているのを見て取れる。私は、そのような飄々とした寛の姿を垣間見て、鉄幹という号に象徴される勇ましい詩人として喧伝される既成概念を払拭できたことを、幸いに思う。

三、与謝野夫妻と「北備」の人びと

与謝野夫妻の高梁での宿泊先が、現在でも国道一八〇号線沿いに営業を続ける老舗「油屋旅館」であったことは間違いない。確実な証拠が残っているからである。晶子は「北備溪谷の秋」(「街頭に送る」)に、「私達の泊った油屋と云ふ宿が川に臨んでゐて、上流から下流までが見渡され」云々と記し、油屋旅館には夫妻の歌を記した奉加帳や色紙などが現存している。

古くは頼山陽から、新しくは映画『男はつらいよ』の山田洋次まで(寅さんシリーズ四十八作の中で二度ロケ地に選ばれた場所は、わずかに高梁と奄美大島だけである)、山陽道の街道筋から見れば随分と奥まったところでありながら、高梁は、多くの文人墨客に愛され続けている。日本で最も高い標高に建てられた天守閣をもつ備中松山城の存在もさることながら、城下町の面影をこの町が守り続けてきたことが大きいだろう。

晶子が、榎地域にあるために「真木(榎)の穴」と呼ばれていた鍾乳洞を「満奇の洞」と表記した歌を詠んで以来、その表記が使われるようになったという満奇洞に行くには、今でも新見駅もしくは井倉駅から小一時間の時間をかけて、バスで山道を登り、停留場で降りてから洞窟の入口までの坂道を歩かなければならない。自動車でも同様である。

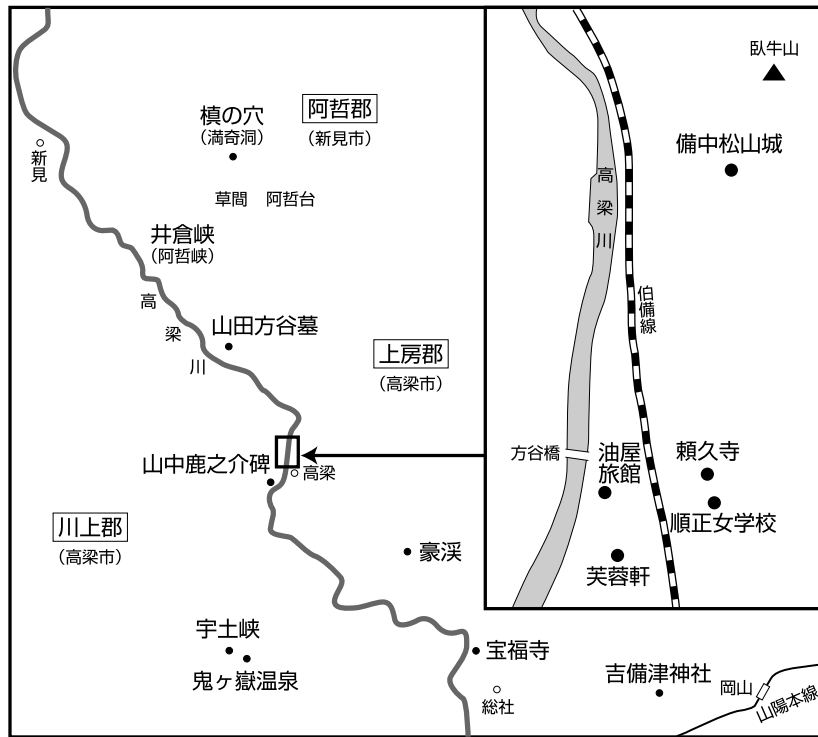
与謝野夫妻は、満奇洞の近くまで自動車で来て(現在の駐車場よりはやや下と聞いた)、そこで藁草履に履き替えて山道を登ったのだと

いう。「北備溪谷の秋」によれば、「豊永村の役場の前で車を駐め、そこで私は藁草履に穿きかへた。私達を鍾乳洞へ案内するために役場は全く空であった」という。榎は、豊永村のほぼ中央部にあり、当時の村役場からも、ほど近い場所にあった。

『月刊プラザ岡山』VOL. 59の「特集・文人が歩いた備北路の旅」には、無署名記事ながら、「そのころ新見に一台だけあったダットサン(荻野酒店所有)で送迎したそうだ」という情報が載る。⁽²⁰⁾「末娘の藤子を連れて」来岡、四日目には「高等女学校で講演」など、内容は正確である。岡山後楽園で撮影した写真を載せ、「昭和四年十月下旬」と記すのは『資料 与謝野晶子と旅』の参照をうかがわせる。

情報提供のソースが示されない記事ではあるが、満奇洞を豊永村に寄付し、その一部を酒蔵として使用していたと伝えられる荻野酒店の名が出てくること、真偽不明ながら新見に一台だけあったダットサンという詳細も加わることから、信憑性は低くないものと判断し、ここに併記しておきたい。晶子は、荻野酒店の主人を「荻野翁」と呼び、「公共事業に一生を捧げつつある此地の徳望家」(「北備溪谷の秋」と称賛している。三十人もの人夫を用いて路を修繕し、わざわざ岡山から取り寄せた「立派な弁当」をふるまうなど、この地における荻野氏の歓待は、晶子たちを大いに「感激」させたようだ。

満奇洞の入口の前には、晶子と寛の歌を、彼らが書いた色紙のままに、やや上下にずらし並べて彫りこんだ歌碑が建てられている。



地図3・与謝野寛・晶子、北備周遊地図

おのづから不思議を満たす百の房ならびて広き山の洞かな 寛
満奇の洞千畳敷の蠟の火のあかりに見たる顔を忘れし 晶子

満奇洞は、井倉駅に近い井倉洞と比べても山の中にあるということもあり、現在でもあまり観光地化されておらず、歌碑も、何も知らなければ見過ごしてしまう（入口の正面にあるのだが、かえって歌碑とは思わずに、素通りされてしまう）ことが多い。無責任な言い方をすれば、変に観光地化されてしまうよりずっとよく、夫妻来訪当時の趣きを今に残すこの場所に来るならば、ぜひ見て帰りたい歌碑である。またこれとは別に寛単独の歌碑「真木の洞ゆめにわが見る世のごとく玉よりなれる殿づくりかな」も付近に建てられている。

ところで、本稿で紹介した書簡の受取人である芳賀直次郎氏が撮影したという満奇洞（槇の穴）での記念写真が、『写真は語る 新見の変遷』⁽²⁾に載る。同書は、「昭和四年一月一日与謝野鉄幹・晶子夫妻が豊永村の槇の穴を訪れその奇勝に感嘆して「満奇洞」と命名した」として、「写真撮影〃芳賀直次郎氏、写真提供〃金谷・森幸影氏」と注記した写真を載せる。左下（手前）の、鉄道員が警察官のような制服を着た人物以外は、いずれも私服を着（晶子を含めて三名の女性は皆和装、男性二三名のうち和服は四名、他は学生服を含めて洋装）、最前列中央向かって左に晶子、右に寛が並び、当然のことながら夫妻中心の写真である。撮影者の芳賀直次郎氏は、高梁市内にあった写真館の主人であり、まさにうつつの役割であった。

手前から奥手にかけて足元の高さが増す洞内で、最後尾の人物は天井に近く、距離も優に十メートルはあり、かなり大きい光量のフラッシュバルブ（閃光電球）を焚いたものと見える。最前列の夫妻の顔などは、むしろ露出オーバーで「白飛び」⁽²³⁾していて、「蠟の火のあかりに見たる顔」どころか「煌々と照らすライトに見たる顔」という風情である。総勢三十名になんなんとする面々は、晶子の述懐に従えば豊永村役場の人々、そして高梁文壇のメンバーであったのだろう。芳賀直次郎氏にとつてみれば、まさに一世一代の写真であったといえる。

先述の通り、「北備溪谷」への紅葉狩りから四年後の昭和八年に、与謝野夫妻は津山や勝山を訪問し、それぞれの場所で歌を詠んでいる⁽²⁴⁾。いずれも現在は、満奇洞と同じく歌碑の形でその事実が伝えられている。すなわち、昭和二十年に谷崎潤一郎が疎開し、その谷崎に会うために永井荷風が訪れたことで知られる勝山に、すでにその十二年前に与謝野夫妻が足跡を刻んでいた⁽²⁴⁾のであった。

そしてその折りに夫妻は倉敷から伯備線で高梁を通過し、新見で姫新線に乗り換えて勝山へと向かっている。ただし、四年前の北備来遊、三年前の再遊取りやめに関しては感想を漏らしていない。

本稿に見た昭和四年の旅で、与謝野夫妻は高梁の油屋旅館に四連泊したと伝えられている⁽²⁵⁾。夫妻の旅は、現代人の私たちの感覚からすればいつも決して短いものではなかったが、この折りの旅は珍しく五泊六日と短く、やや長いパッキングツアー⁽²⁶⁾並みであった。一日目は東京を発ち、岡山を経て高梁へ。翌日、午前には臥牛山登山と松茸狩り、午後は

宇土峡の薬師温泉から山中鹿之助碑へ。三日目に山田方谷の墓を参り、豊永村の満奇洞から草間村へ、阿哲峡での舟遊びをして宿へ。四日目は高梁市内の諸寺を巡り、午後高等女学校で夫妻の講演、石垣で有名な頼久寺で歌会。五日目に高梁から総社へ移動し、豪溪から雪舟ゆかりの宝福寺と吉備津神社を廻って岡山を経由し、京都で一泊して六日目に帰京している。北備溪谷ではほぼ三日間、そのうちほぼ一日を新見で過ごすという日程であった。高梁近辺の見所は大抵回っており、翌年に再び高梁を訪れても、目新しい周遊先は限られていた。

芳賀直次郎氏が、どのような経緯で与謝野夫妻の高梁来訪を実現化し、また、再来が果たせぬままであったことに対して事後どのような対応を取ったか、その大部分は、未だに知られぬままである。ただし、その一端に関しては、右の書簡より明らかにすることができた。芳賀直次郎氏には、先述の通り美術関連の著書もあり、当時の高梁地方における一方ならぬ知識人であった⁽²⁷⁾。

ところで、与謝野夫妻以前に、満奇洞のみならず井倉洞にも言及した作品がなかったのは、それらの鍾乳洞が観光地として一般化したのは戦後のことであったという理由が大きいだろう。満奇洞は、与謝野夫妻来遊の頃には、まだ酒の貯蔵庫として使われていたという。阿哲台で最も早く開発の手が入ったのはこの満奇洞であった⁽²⁸⁾。井倉洞は発見されたのが一九五八年、さつそく翌年から一般公開されているが、満奇洞に比べて歴史はずっと新しい。

日本一有名な鍾乳洞といえば山口県秋吉台の秋芳洞であろうが、こ

こもまた観光地となったのは一九〇九年と、私たちの大半が漠然と
思っているよりずっと新しい。そもそも鍾乳洞などの自然地形を、料
金を取って見せるという考え方そのものが、じつはそれほど古いもの
ではなかった。ちなみに、「瀧穴」と呼ばれていた鍾乳洞が「秋芳
洞」と名づけられたのは一九二六年のことである。⁽²⁸⁾

海水浴が一般化したのは大正時代からであり、(明治十八年に開設
された大磯海水浴場が日本初といわれる)、レジャーとしての登山の
一般化も同じ頃であったという点からは、自然のつくり出す造形に日
本人が恐れや宗教的感覚よりも開放感や娯楽的感覚を感じるようにな
ったのは、ほんの二百年足らずのことにはすぎないという事実が実
感として理解できる。先に述べた田山花袋などは、明治三十年代(お
よそ一九〇〇年以降)に流行したガイドブックの書き手として、その
ような流れに大きく棹さした人物であったし、若山牧水の「幾山河」
の歌が持て囃されたのも、そのような背景があつてこそそのことであ
る。そして、あまり言われないことだが、与謝野晶子にも旅行記・紀
行文集と呼ぶべき著作がある。⁽²⁹⁾

ともあれ、与謝野夫妻が周遊した範囲を阿新(旧阿哲郡・現新見
市)を中心に見れば、赤馬(豊永村)の槇の穴(満奇洞)から草間
村、さらに井倉峡(石蟹郷)という範囲になる。すなわち、阿哲郡
(新見市)の南東部(全体の約五分の一)ということになる(地図
1・3参照)。わずか一日の行程であつたが、新見阿哲は、与謝野夫
妻にどのような印象をもたらしたであろうか。新見といつても、彼ら

が訪れたことのわかつているのは満奇洞であり、また井倉峡や草間な
どが加わるくらいであるのだが。

まきの洞ゆめに吾が見る世の如く玉よりなれる殿づくりかな 寛
洞の闇いとゞはかなき蠟の火の星よりもげに高ふれるかな 晶子

それを伝えるのが、晶子の随筆「北備溪谷の秋」であり、また、こ
の旅の折りに詠まれた歌であるだろう。中でも満奇洞で詠んだ晶子の
歌は、晶子らしいロマンティシズムに溢れた気品のある歌である。こ
れほどの歌人と常に比べられる寛が気の毒なくらいであるが、しかし
寛は、いつも悪びれることなく、みずからも晶子とともに各地で歌を
残しており、ここでも同様であつた。以下に寛の歌を紹介する。⁽³¹⁾

油屋の宵の障子を尚鎖さず月はなけれど川霧をめぐす 寛
松山の城荒れたれど悲まずもみぢのなかを歌ひて帰る 寛
鳥として霧に浮べる山々を城に見おろす我と天つ日 寛

晶子の方が何倍も上手な詠み手であることくらいは、寛も先刻承知
であつた。それを知つたうえで晶子を支えつつ、自らも積極的
に歌を残している。これは、むしろ寛のもつ、ある種の「すごさ」であつた
と思つのである。

おわりに

そのような寛のまなざしの中でこそ、晶子の才能は見事に開花したのであった、などと記せば、少しばかり寛びいきに過ぎるであろうか。私は本稿に書いたことを調べる過程で、それまで詩集『東西南北』などに代表されるこわもての寛の姿を、漠然と信じ込んでいた自分に気がついた。漢語を多用する男性的な詩や、勇ましい調子の歌、そして、そもそも「鉄幹」という号のもたらずイメージが強かったのだ。あるいは晶子の、これも有名な、「柔肌の熱き血潮に触れもせでさびしからずや道を説く君」などと歌に示された、一心に「道」を突き進む厳格な石頭というイメージも強かった。そんなイメージに、いわば目を眩まされていたのである。

確かに、晶子ほどの天才を常に身近に意識することによるある種のしんどさ、いまの言葉で言えばプレッシャーは、同じく文学を糊口の資とする者として相当のものであっただろう。彼が、次第に創作から遠ざかることも、その線で理解できるような気もする。だが寛は、そのことに悪びれもせず、気落ちもしていない。じつに自然に、天才歌人の晶子と暮らして、その才能を摘みもせず、必要以上の気もつかわない。

果たしてその内実はどうであったか、親族縁者の目から見た証言は、長男与謝野光氏による回想録『晶子と寛の思い出』（思文閣出版、一九九一年）をはじめとする数々の例があるけれども、それはや

はり当事者でなければわからない部分が多いだろう。しかしそれでも例えば晶子のネーム入り封筒をいつも借りたまま、ついに自分の封筒をつくらなかった寛の姿は、私にとつての、それまでの屈強な鉄幹像を見事にくつがえしてくれた。そののみならず、逸見久美氏をはじめとする諸家の努力で収集され、より多くの閲覧に供された与謝野夫妻の書簡は、等身大の夫妻の姿を生き生きと伝えてくれる。本稿に紹介した書簡が、その方面での一助を担うことができたと考えている。そのような目で改めて満奇洞の前にある、晶子と寛の自筆の色紙を並べて彫りつけた歌碑を見ると、その鴛鴦ぶりが、なお一層微笑ましく思えるだろう。

昭和四年（一九二九）十月、五泊六日の旅程ではあったものの、与謝野寛・晶子の夫妻と六女の藤子氏が備中高梁から新見への一帯を訪れたことは、「満奇洞」の名前だけではなく、この地域のあちこちにその形跡を残している。そして、翌年にもまた夫妻は山陰を経てこの地域を訪れる予定であった。それが実現しなかったことは残念ではあるが、芳賀直次郎氏宛の書簡によって「実現しなかった旅」として記録できることは、意味のあることだろう。この地域への、与謝野夫妻来遊に関する資料が、今後もなお発掘・公表されることを願ってやまない。

註

- (1) 沖良機氏『資料 与謝野晶子と旅』(武蔵野書院、一九九六年)。ちなみに、同書の帯には森(旧姓与謝野)藤子氏による次のような述懐が記されている。「末の子の私が手を離れたころ、つまり大正末期から漸く親たちの旅が多くなつた。子どもが小さければ小さいなりに、また大きくなればそれなりに心配は絶えません」と洩らしたという母にとつて、旅は暫くの憩いの場であり、創作への栄養剤であつた。」
- (2) 注(1)『資料 与謝野晶子と旅』における沖氏の集計によれば、百七十回以上の旅のうち、百十五回が寛との旅であつたという。
- (3) 明治十八年(一八八五)八月二十四日に生まれ、昭和三年(一九二八)九月十七日に享年四十三(数え四十四)で亡くなつた牧水に対して、晶子は明治十一年(一八七八)十二月七日に生まれ、昭和十七年(一九四二)五月二十九日に享年六十四(数え六十五)で亡くなつた。
- (4) 晶子は、『街頭に送る』(大日本雄弁会講談社、一九三一年)に収めた「北備溪谷の秋」(『横浜貿易新報』一九二九年十一月十七・十八・十九日初出)で、「北備」と称している。「北備」とは、必ずしも一般的な名称ではないが、与謝野夫妻来訪地域を総称する名称として、晶子の表現を借りてこのように呼んでおく。現在は、備中の北といふことで、通常「備北」と称する。ほぼ高梁市と新見市を合わせた地域。「北備」は、広島県の東北部を北部備後という意味で称して用いる場合が多い。ただし、使用例は多くなく、これも「備北」と呼ぶことがあり注意を要する。岡山県北西部の北半分は阿哲と新見を合わせて「阿新」とも呼ばれてきた。二〇〇五年以来の新・新見市の範囲であり、この呼び方では高梁市域は含まない。晶子が「北備溪谷」と呼んだ場所は、通常、阿哲峡・井倉峡、あるいは井倉溪谷などと呼ぶ。
- (5) 『阿哲郡誌』上・下(社団法人阿哲郡教育会、一九二九・三一年)。「阿哲郡明細図」は、夫妻来訪と同年に上巻が刊行された同書に掲載されている。一部加筆し、図版として使用させていただく。
- (6) 一九八七年十月から一九九六年三月まで、新見女子短期大学(現在、公立新見短期大学)に在職のため、同短期大学宿舎に八年半居住した。昭和四年の与謝野夫妻来訪時に中心となつた方々は、すでに大半は亡くなつていた時期であるが、仮に二十歳であつた人は、一九八七年にはまだ八十歳未満であり、赴任直後から聞き取り調査を進めていれば、まだまだ多くの情報を得られたことと残念に思う。
- (7) 野山屋主人編『高梁歴史人物辞典』(私家版、二〇〇六年)によれば、芳賀直次郎氏は、高梁市大工町にあつた写真館・芙蓉軒の主人。与謝野夫妻を高梁に招いたとされる。「高梁町長徳田蕃之等が同行し松山城に登城した。晶子は和服姿であり、草履の緒が切れてハンカチを割いて鼻緒を結んでの難歩行であつた。当時の城は天守閣の屋根、壁は落ちて、瓦礫の中に松の大き木が生えて荒れ放題で、僅かに正面の破風を針金で引つ張り倒壊を免れていた。」と、松山城に登り詠んだ歌は「しらじらと溜れる霧の上走る吉備の古城の山の秋風」。寛の歌「松山の溪を埋むるあさ霧にわが立つ城の四方しろくなる」は松山城の二の丸の東側に歌碑が建立されている。建碑の背景については、平見郡司氏「シリーズ岡山の文学碑64与謝野寛」(財団法人岡山県郷土文化財団会報『きび野』第103号、二〇〇六年)に詳しい。この雑誌については、平見氏よりご教示いただいた。
- (8) 与謝野夫妻と正宗敦夫との関わりは、赤羽淑氏『正宗敦夫をめぐる文雅の交流』(和泉書院・近代文学研究叢刊、一九九五年)、吉崎志保子氏『階上階下すべて書にして 正宗敦夫の世界』(私家版、一八九九年)を参照。
- (9) 順正女学校は、福西志計子・木村静によつて明治十四年(一八八八)高梁市向町に開設。中四国で最初の女学校として知られる。昭和四年当時は岡山県立順正高等女学校。倉田和四生氏『福西志計子と順正女学校』(吉備人出版、二〇〇二年)参照。
- (10) 逸見久美氏編『与謝野寛・晶子書簡集成』第三巻(八木書店、二〇〇二年)参照。なお、同書簡は菅沼宗四郎氏『鉄幹と晶子』(有賀精発

行、一九五八年）よりの転載。

(11) 石上敏「諸家書簡集―新資料の紹介 与謝野 寛」(岡山手紙を読む 会編『書簡研究』3、和泉書院、一九九〇年)。

(12) 注(4)の『街頭に送る』序文は、与謝野家の窮状と晶子の役割を示して余りあり、しばしば引用される。「最近の私は、かやうな物でも街頭に提供するのでなければ、経済的に家族を扶養し得られない境遇に喘いでゐる。従来の一冊ある自分の感想集は、すべて書肆から望まれて出版したが、此の一冊だけは私自身から進んで書肆に出版を懇請した最初のものである。私が如何に窮迫してゐるか、読者の諒察を得たい」(『鉄幹晶子全集』21、勉誠出版、二〇〇八年による)。

(13) 従来、「旅かせぎ」の内実に関しては、移動の交通機関の中ですらおこなう短冊などへの揮毫、そして作歌のことと思われてきたはずで、管見の限りで教科書販売に触れた例を知らない。

(14) 山陰での夫妻の足取りを簡単に見ておきたい。五月十五日の夜汽車で東京を出発した夫妻は、城崎・鳥取を経て二十五日に松江に至る。二十六日には奥出雲を訪れ、溪谷を渡渉して鬼の舌振しんぶらなどの名勝を見ている。そして出雲大社などを周遊し、六月一日に三朝温泉に宿泊。ちなみに、鳥取県西伯郡(現大山町)の大山寺は、山岳信仰に由来する修験道の道場として栄えた。夫妻来遊の頃には、廃仏毀釈による荒廃を脱した頃であったが、晶子も「去年焼けた本堂の跡を経て」(『北備溪谷の秋』)と記しているように、直前の昭和三年(一九二八)に火災で焼亡しており、本堂はなかった。

(15) 鳥取へと向かう晶子の心に、かつて気持ちを通わせたとする有島武郎の面影があったと考えることが出来る。有島が『或る女』(大正八年刊)を晶子に贈つて以来、文通を続けた両者の間に何らかの情意が介在したと考えるのが現在の通説である。昭和二年に砂丘を訪れ「浜坂の遠き砂丘の中にさびしきわれを見いでつるかも」(『山陰土産』)所収。有島がこの歌を詠んで以来「鳥取砂丘」という名称が固定化したという。晶子における「満奇洞」を髣髴させる逸話である)と詠ん

だ有島は、それから僅か一ヶ月の後に波多野秋子と心中する。鳥取砂丘での晶子の詠歌「砂丘とは浮かべるものにあらずして踏めばなるかな寂しき音に」(『砂丘踏みさびしき夢にあづかれるわれを思ひて涙ながしぬ』)などは、有島への思いを除けて考えることはできないだろう。無論晶子は一言も書いていないが、三年前に遊つた有島の足跡を追つて彼女が是非鳥取へ廻りたかつたと考えれば、それはそれで納得できる行程である。そのような情意の面を含めて晶子を見守つた寛のあり方が才能を開花させる大きな支えとなつたことは想像に難くない。

(16) 温泉好きで知られる夫妻にとつて、高梁周辺に温泉がなかつたという事情も関与したかと思われる。注(1)の『資料 与謝野晶子と旅』の「資料2 与謝野晶子と旅関係一覽」二の①「都道府県別年月付き宿泊温泉一覽」を見るに、昭和五年の山陰周遊では城崎(一泊)以下、鳥取(一泊)、玉造(二泊)、松江(二泊)、皆生(一泊)、三朝(一泊)、また、昭和八年の岡山再訪では下津井(一泊)、真賀・湯原・奥津(いずれも休憩)と存分に温泉を楽しんでいる夫妻であったが、北備溪谷の旅では二日目の薬師温泉が唯一の温泉であった。ちなみに、岡山県で薬師温泉といえは赤磐市(旧山陽町)にあり、松山城址(臥牛山)からは片道ほぼ六十キロの道のりである。不可能ではないにしても、これは高梁付近の別の温泉(宇土溪近くの鬼ヶ嶽温泉)のことと考えるべきであろう。

(17) 昭和四年秋の「北備溪谷」への旅の詳細が必ずしも明らかでないのは、その直前に一ヶ月に及ぶ鹿児島への旅、さらにその前年には一ヶ月半の満蒙旅行があつたこともあるだろう。それらで詠まれた歌は、第二十三歌集『霧嶋の歌』(改造社、一九二九年)及び第二十四歌集『満蒙遊記』(大阪屋号書店、一九三〇年)に収められるが、北備の旅における詠歌をまとめた歌集はない。しかしそれ以上に、第二次『明星』が昭和二年四月に終了し、次に『冬柏』が創刊されるのが昭和五年三月であり、いわばその谷間にあつて旅の歌や紀行、あるいは消息欄での報告が存在しないという事情が大きかつたものと考えられる。

逆に、昭和八年の岡山の旅は、六月二十九日から七月十日までの『山陽新報』に逐一報道されているという（『岡山県総合文化センターニース』No.367・368、一九九五年参照）。

(18) 注(11)の拙稿参照。寛は、晶子の封筒以外にも、「明星」発行所及び印刷所、鷗外全集編纂所、「日本古典全集」編纂所などの印字入り封筒を宛先や内容にかまわず使っており、むしろ名義入りの封筒などに對する無頓着さが伝わってくる。

(19) たとえば、かつて高梁を通った明治四十年（一九〇七）の若山牧水は、備中漕井（総社市内）で中国鉄道（吉備線）を降りて一泊目が高梁泊まりであったと考えられる。当時、早稲田大学の一介の学生に過ぎなかつた牧水の揮毫や伝承が残っているわけではない。しかし、山田方谷を訪ねた長岡藩の河井継之助が油屋に泊まったことは、牧水も心得ていたと思われ、そうでなくとも牧水がもし油屋旅館に宿泊したならば、それを書き残すことがあつてもよい宿であつた。ちなみに、続く二泊目の宿は新見市内であつたと思われるが、それがどこであつたか皆目見当つかない。これらに對し、牧水の三泊目が新見市哲西町と広島県東城町との県境にある「熊谷屋」であつたことは、倉敷天文台の台長であつた本田實氏の調査によつて明らかになつている（『牧水の幾山河』（『文藝春秋』一九六四年二月号。これ以後「牧水の旅の心に触れる」『備北文学』15、一九七三年、「若山牧水と明治40年『別離』の旅』『読売新聞』一九七四年二月十日など、本田氏は繰り返しこの点を述べている）。ちなみに、この牧水の備北吟行に関しては、有本芳水を介して田山花袋『蒲団』の示唆があつたと伝えられているが、真偽未詳。近代小説（散文）中でも最大級のセンチションを巻き起こした『蒲団』の田山花袋と、同じく歌集（韻文）で最大のセンチションを惹き起こした『みだれ髪』の与謝野晶子が、いずれも阿新地域と関わりをもつことは興味深い奇遇である。

(20) 岡山人の生活情報誌『月刊ブラザ岡山』（VOL. 59、一九九七年）。この雑誌記事の存在は、岡山県立図書館でご教示いただいた。ま

た、現在の油屋旅館にも「ダットサンでの送迎」が伝えられている。

(21) 他にも、夫妻で訪れた場所には、このように両者の歌を並べて彫つた歌碑は少なくない。堺市博物館編『晶子歌碑めぐり（全国版）』（二瓶社、一九九一年）など参照。注(4)の「北備深谷の秋」（『街頭に送る』所収）によれば、晶子は、槇の穴を「真木山の鍾乳洞」と呼び、「朱蠟燭を手にして進み入つた」内部を「室毎に側室があり、竈があり、棚、柱、闕がある。鏡、釣鐘、伏龍、池、畑さまさまの奇形をした鍾乳石の大塊が行く処に薄明を透して望まれる」云々と描写したあと「冥府の路を辿るやうな奇怪な光景」と記している。一方、寛は「何と云ふ偉大巧妙な自然の建築である」と感嘆した由。その反応にもかかりの落差があつたことになる。

(22) 社団法人新見青年会議所創立一〇周年記念出版「写真は語る新見の変遷」特別委員会編『写真は語る 新見の変遷』（社団法人新見青年会議所、一九七八年）。同じ写真は、太池貞治氏監修『ふるさとの想い出写真集 明治・大正・昭和 新見』（国書刊行会、一九八五年）にも掲載される。

(23) 与謝野夫妻が岡山への再訪を果たしたのは昭和八年（一九三三）に至つてからであつた。注(17)の『岡山県総合文化センターニース』より引用させていただく。

「昭和8（1933）年6月26日、与謝野夫妻は岡山に向けて東京駅を出発した。翌27日、山陽線と気駅で下車し、正宗敦夫の出迎えを受けて同家に泊まった。正宗家への来遊は寛にとっては二度目のことであつた。ここで、この後の夫妻の道程を略記しておく。」

28日 瀬戸内の島々を巡遊し、午後は伊部焼に歌を彫る。

29日 正宗邸から岡山駅、下津井へ。瀬戸内海の島々を遊覧。

30日 味野の高等女学校で講演。

7月1日 倉敷駅から汽車で勝山へ。神庭の滝、真賀温泉、湯原温泉に行く。

2日 院庄の作楽神社、奥津温泉、津山を観光。

3日津山の高等女学校で晶子が講演。

その後岡山へ向かい後楽園の会合に出席、夕食後に離岡。」

右のように、備前・岡山・倉敷という山陽線沿いの通過地・宿泊地を除いては、旅程は四年前とは重ならない。

(24) 昭和八年の岡山来訪については、正宗敦夫との関わりを中心に、先述した赤羽淑氏『正宗敦夫をめぐる文雅の交流』の第四章「与謝野寛・晶子との交渉」、また吉崎志保子氏『階上階下すべて書にして正宗敦夫の世界』の第五章「与謝野寛・晶子と敦夫」などに詳しい。赤羽淑氏著には、正宗敦夫による「与謝野先生の思ひ出」(『冬柏』第六巻第五号、一九三五年)、「与謝野晶子刀自をしのぶ」(『書物展望』第十二巻第七号、一九四二年)、「色紙による晶子さんの思出」(『古典研究』第三号、一九六八年)が載り、有益である。谷林博氏『岡山と鉄幹』(一九六〇年)、吉崎志保子氏『与謝野鉄幹と岡山』(一九八九年)などを参照するに、明治三十三年(一九〇〇)に寛が創刊した『明星』の第六支部(新詩社岡山支部)が岡山に設けられた関係で、続いて日本古典全集の編集をもにした(大正十四年から二百六十六冊刊行された中で、七十冊までの編集に与謝野夫妻が関与した)ために、岡山との縁は深い。そもそも、寛は十代の少年時一年余りを岡山市内(国富の安住院)で送っており、岡山との縁は浅からぬものがあつた(吉崎志保子氏「与謝野寛と岡山の中学」、『樹木』第三十八巻八月号、一九八八年初出、『与謝野鉄幹と岡山』所収)参照。

(25) この旅の写真として知られる油屋旅館所蔵の写真(資料「与謝野晶子の旅」口絵に掲載)には、与謝野藤子氏とらしい女の子が写っている。東京から高梁に着いて油屋に宿泊した二日目の朝、中腹に備中松山城のある標高四七八メートルの城山(臥牛山)に登った折りの写真である。洋装の男性(いずれも成人)が十名、和装の男性が三名(内一名は学生帽)、他に学童らしい男の子が二名、女性は晶子と藤子氏の他に一名の、総勢十八名の写真である。背後には整備前の荒れ果てた松山城が写っている貴重な記録写真であるが、白いベレー帽を被った

藤子氏が寛の前に立っていることは、寛が格段に可愛がったということとを証するようで微笑ましい。

(26) 旅程が短かったのは、この年十歳になる末娘(六女)の藤子氏を連れていたからでもあるだろう。ただ、のちに至るまで藤子氏は夫妻の旅、寛没後は晶子の旅に同行することが多かった。これは、表向きには藤子氏が病気がちであったからとされているが、資料「与謝野晶子と旅」において沖氏は、「没後のほとんどの「旅」に寛が可愛がった末娘・藤子を連れ添ったことは、藤子の中に寛を見ていたように思えてならない」と推測している。

(27) 芳賀直次郎(賢壽)氏は、先代の直次郎氏(大正二年没)が創業した写真館(芙蓉軒)を継いで二代目直次郎を名乗り、高梁の郷土史家として数々の業績を残した。備中松山藩主板倉家の菩提寺として名高い安正寺に墓所があり、その墓誌によれば昭和六十年二月二十三日に九十四歳で亡くなっている。高梁市文化財保護委員会をつとめ(高梁中央図書館所蔵「山田準先生の事」平見郡司氏転載、二〇〇六年)、山田準氏を扶けて『山田方谷全集』の編纂に関わっている。与謝野夫妻を高梁に招く前年(昭和三年)には、労作『山田方谷先生遺墨集』(皇国宣揚協会・方谷先生遺墨集発行所)を編集し、「撮影編纂兼発行者」として本業の技術を遺憾なく発揮している。「岡山県高梁町大字大工町二番地」に建てられた芙蓉軒は、築百年を経ながら現在もなお往時の面影をとどめている。

(28) 赤木敏太郎氏編『豊永村誌』(阿哲郡豊永村、一九三三年)には、「満奇洞」を「一名 楨の穴」として、「天保の初年赤馬の狩人狸を追ひつめた際発見したりと伝ふ」とし、昭和二年に萩野繁太郎氏が周辺の土地を購入し豊永村に寄付して以来、「管理方法を定め、観覧上の設備をなし天然名勝記念地として」保存したと記す。

(29) ちなみに、明治三十二年(一八九九)に発見された小半(おながら)鍾乳洞(大分県佐伯市)が、大正十一年(一九二二)に国指定の天然記念物になったのが鍾乳洞への最初の天然記念物指定であった。

ただし、昭和元年（一九二六）に観光整備された秋芳洞にしても、当時の人々は「水神の洞」と恐れて近づかなかったという。

(30) 本稿に関わる時期のものでは、昭和三年の中国東北部からモンゴルへの寛・晶子合作の旅行記である『満蒙遊記』（大阪屋号書店、一九三〇年）がよく知られている。他にも晶子の評論集（たとえば最後の評論集となった『優勝者となれ』（天来書房、一九三四年）には、「近畿の旅」「九州の旅」「四国遍路記」などが収められる）には紀行文が散見される。

(31) いずれも、油屋旅館所蔵の短冊、掛軸、写真への書き込みによる。この時の晶子の詠は、「たそがるゝ方谷林よ河原なる草の紅葉は叢にして」「短冊」「きりぎしはひたすら直ぐに天そくり紅葉も身をば薄くして倚る」「同）、「瀬戸の海伯著に霧の分れ去りあらはになりぬ痛ましき城（掛軸）など。

(32) 長男・光氏の『晶子と寛の思い出』の他に、四女・宇智子氏の『むらさきぐさ―母晶子と里子の私』（新塔社、一九六七年）、六女・藤子氏の『みだれ髪―母・与謝野晶子の全生涯を追想して』（ルック社、同前）、次男秀氏の妻・道子氏の『とっきり花嫁の記―ははと謝野晶子』（主婦之友社、同前）、光氏の妻・迪子氏の『思い出―我が青春の与謝野晶子』（三水社、一九八四年）、同『姑の心、嫁の思い―義母・与謝野晶子との会話』（PHP研究所、一九八八年）などがある。

【付記】

本稿を草するに当たり、特に、油屋旅館・岡山県立図書館・高梁中央図書館の関係各位には、多くの労をお取りいただいた。記して謝意を表すものである。

本稿は、大阪商業大学比較地域研究所プロジェクト「グローバルズムの中のアジア経済と社会」（平成20・21年度）の成果の一部である。

【追記】

本稿では、通例にもとづき与謝野藤子氏を「六女」と記したが、たとえば堺市立中央図書館編『与謝野晶子著書・関係資料目録』（二〇〇九年）では、森（旧姓与謝野）藤子氏のご壮健な近影を載せ、「五女」と記している。

以上を記し、「六女」は、あくまでも通例によるものであることをお断りしておきたい。